

九月〇日

尚武作命 甲 第二〇〇三号

尚武集團命令 八月二十九日一七〇〇 大和

一、大命ニ依リ予ハ即時、戦闘行動ヲ停止セントス、

昭和二十年八月二十五日〇〇〇〇ヲ以テ第十四方

面軍ニ付スル作戰任務ヲ解除セラル。

二、略

三、略

四、略

尚武集團長 山下 奉 文

鉄兵団の任務、いや私自身の任務は終わった。銃の御紋章をこのままで敵に渡すことは出来ないとな全部消した。かくして九月十二日下山し、九月十九日ジョネスにて武装解除さる。空気の抜けた風船のような気持ちで米軍の指示にしたがった。

―後 記―

昭和二十一年十二月まで戦場犯罪者として労役に服さ

された。

比島戦記

高知県 橋本 和水

―玉砕を宣告された三月十五日の夜―

昭和二十年一月連合軍がルソン島のリンガエン湾に逆上陸しマニラに向かって南下しつつある、という報に接してからいくばくもへずしてマニラを占領された。マニラにそそぐパシフィック川のみなもと、ラグナ湖畔カルドナに駐留していた我々船舶部隊は、完全に制海権をうばわれたので、三月初旬、船舶部隊はすべての舟艇を爆破し、ラグナ湖に沈め、山岳部隊となり長期作戦にそなえよとの兵団長の命によりボソボソへと転進した。

昭和十九年末頃よりすでに制空権は米軍の手中にあり連日の夜間行動であった。

昭和二十年三月十二日、野口兵団の総反撃隊長であった熊沢部隊長の命により、我々宮村隊は斬込作戦に出撃

することに成り、三月十四日未明神勅山の山麓に到着、日没を待つて各小隊は戦闘配置につき、私達指揮班は宮村隊長と共に神勅山の中腹にあった大杉小隊の壕に行き大杉小隊の援軍となった。

大杉少尉の説明によれば、山間に突出したこの神勅山は最前線であり、すでに左右の山には米軍が進攻しているとのことで、山麓には横須賀重砲が一個小隊いるはずである、ということであった。

早速、宮村隊長の命を受けた私達指揮班は壕から百メートルぐらいしたの大杉小隊が掘ったタコツポに入り配置についた。

十五日、夜明けと共に米軍の猛攻が始まった。迫撃砲と銃撃の集中攻撃がすこし間隔をおいてはこうごくり返され、しかも迫撃砲の発射音が聞こえたと思つた瞬間さくれつするというほどの至近距離にあり、敵の弾丸は兩あられと私達のいる神勅山に容赦なくふりそそいだ。我々は小銃で応戦するのみにてまったく手も足もない状態であった。

そのうち山麓にいた横須賀重砲の戦友が血みどろに

なつて我々の陣地までのぼつて来て、身を隠すタコツポもなく右往左往するなかにつきつぎと銃弾にたおれていったがどうすることも出来なかつた。

私が一番はしのタコツポにいたところ突然たおれかかつてきた戦友があつた。迫撃砲弾の破片で片腕が半分切れていた。よくみるとそれは同年兵で愛知県出身の浜松上等兵であり出血がひどかつた。はやく衛生兵のところへ連れて行つてくれというが衛生兵は百メートルぐらいのうしろの壕にいる。しかしこの弾丸のなかでは身動きも出来ない。としばらくちゅうちよしたが戦友をこのままにしておいては命が危ないと思ひ、砲撃の間隙をみてタコツポをでて、戦友を肩にかけ上方の壕へと向かつた。

何十メートルものぼらないうちに、また迫撃砲の集中攻撃が始まつた。私は戦友を岩蔭に押しやりながらにげなしに先刻まで自分が入つていたタコツポを振りかへつた。その瞬間タコツポから真つ赤なものが舞いあがるのを見た。日没前タコツポからのぼつて来た木村伍長が、「浅川（旧姓）お前は危機一髪で命拾ひをしたぞ」といいながら、「お前が出た後のタコツポに入った兵隊が

俺との間に落下した迫撃砲弾で頭が吹っ飛んだ」とい
い、タコツボを引き揚げる時彼のポケットから取り出し
たという軍隊手帳をみせながら、彼は横須賀重砲の兵隊
だったと話してくれた(私が見た真っ赤なものは彼の戦
友の最後であったのである)。

再び戦友を肩にかけて衛生兵のいる壕へと懸命にの
ぼった。ようやく壕にたどり着き衛生兵に戦友をあづ
け、再度配置部署に着くことを隊長に報告したところ宮
村隊長より「浅川お前は俺のもとに残れ」といわれ隊長
のもとに残ることになった。

その時であった、血みどろになった伝令がただ一人婦
り隊長に報告したところによると、各小隊へ連絡に行く
途中の伝令が、稜線に向かって進撃中の敵と遭遇、他の
伝令は皆やられ、もう小隊との連絡はとれない、という
ことであった。

この報告を聞いた途端、いつも温顔の隊長がグツと軍
刀と拳銃を握りしめ「全員配置につき稜線を死守せよ」
と号令を発した。

我々はただちに稜線にかけのぼり前方をみると、カム

フラージュした戦闘服を着た数十人の米兵が肩にかけた
機関銃を乱射しながら我々の方に向かって稜線をのぼっ
て来るではないか。私達は小銃で必死に応戦した。とつ
じよ前にいた大杉小隊の軽機が後退してきた。隊長は大
声で「軽機さがるなうてうて」と怒号したが「軽機故障」
と叫びながら軽機はさがった。軽機を失った我々は必死
で攻撃するも三八式歩兵銃では米軍の機関銃の前には歯
がたたない。数十人の米兵が私達の目前にせまって来
た。

隊長は彼我の銃声とどろくなかで「全員さがるな、う
てうて」と必死の声で怒号した。このときさいわいにも
射手を失った軽機があったのか、軽機が再び前に出て来
た。それにいきおいを得た私達も必死でうちまくったが
敵とはあまりにも至近距離にありねらいうちどころでは
なく、彼我まったくの乱射であった。

どのくらいいたったのか、相当長い時間に思えたが五、
六人の戦死者を残しようやく米軍は後退し、稜線はかる
うじて死守出来た。

ほっと一息と思った途端、今度は左右の敵陣から稜線

に向かって交互に集中攻撃がはじまった。その時、隊長は山麓の各小隊との連絡もとれずもうこれまでと思ったのか。稜線から声を張りあげて「宮村隊は前面の敵に向かって突撃をかんこうせよ」と数回号令した。この号令にこおうして突撃して行った各小隊の悲壮な喚声を最後に私達の陣地は孤立してしまったのであった。

敵の攻撃は一層はげしくなり、つぎだした山の稜線にいた我々は右に左にと稜線をはいまわって敵の攻撃をのがれるよりほかにすべはなかった。「手も足も出ない」というのはまさにこのことであろうと思ったことであつた。

迫撃砲弾の炸裂音とともに周囲の戦友がつきつきと散って行く。炸裂音を聞くたびにこんどは私の番だ、と死の瞬間を待つのみであつた。

次の瞬間、耳をつんざくような炸裂音と同時に私はすっぽり土砂をかぶり目のさきが真っ黒になった。しばらくしてやっと頭をあげると、すこし上方に体を伏せていた同僚の津野戦友の姿がなく、そこにあつたのは摺鉢状の穴であつた。津野上等兵は直撃弾を受け吹っ飛んで

しまったのであり、本当のさんげであつた。

となりをみると群馬県出身の小栢兵長が破片で左大腿部をけずりとられて血まみれになっていた。私は戦友のもとにはいより傷口に三角巾をあてゲートルをといてかり包帯をしてやったが、終らないうちにまたもや攻撃が始まつた。

近くにいた川島兵長と二人で小栢兵長を稜線の向うがわへ押しやったが、私はもうすでに身動きできなかった。山の斜面に身を伏せ次の瞬間を待っていた。しばらく機銃の集中攻撃が続いた。そのとき私は両大腿部をむちで打たれたような感をおぼえた。しばらくたつてから両大腿部がなまあたかくなり鈍痛をおぼえたが弾丸のなかではどうすることも出来なかつた。

そのうちにまた向う側の攻撃が始まり、弾丸を避けて戦友が二人私のところに来た。私の大腿部をみて

「両足を貫通している、手当をしてやるから早くズボンをおろせ」

というのでおろしたところ「貫通は右だけで左は擦過傷だ」といいながら三角巾で止血してくれた。かり包帯

も出来ないうちにまたもや私のいるがわが集中攻撃を受けはじめ、戦友は再び向うがわへひさんしたので、私は伏せたままズボンあげた。そのとたん近くにさくれつした迫撃砲弾の破片がこんどは右下腿部の二か所につきささった。

周囲には息もたえだえの重傷者や戦死した戦友が横たわっているがどうすることもできない、まったくの生き地獄であった。この時戦死した戦友の指を切りとって略帽に入れ、血のしたたる略帽を腰にぶら下げた加納上等兵が、うしろの部下をニラみつけ「俺をうつなよ」といった時のあのぎょうそうは私のうりにいまなお焼きついてはなれない。

その後は稜線に進攻してくるけはいもなく、十人ぐらいを、稜線にのこし日没前したの壕に引き揚げ衛生兵の応急処置を受けた。私達がいいた壕は山の中腹を一端縦穴にほりさげ、それからさらによこにはって奥は丁字型になっており、大杉小隊が一月掛かりではったという堅固な壕であり百人ぐらい入れる、と大杉少尉から話を聞いた。

ローソクのうすあかりのもとでせおっていた雑糞をおろしたところ、雑糞につけた飯盒は二か所弾丸がつかぬいていた。これをみた私は、木村兵長がいった「お前は命拾いをしたぞ」という言葉をしみじみかみしめ一日生き延びたことを痛切に感じた。

その夜、ローソクのおかりのもとでなにごとかひそひそと話していた宮村隊長と大杉小隊長が「我々は明朝頭上で地図を焼却し自決しましょう」と話を結びそのあと無言で対座した。

私は昭和十九年七月部隊編成以来事務室勤務として常に隊長のそばにおり、一度も隊長の激怒した顔を見たことがなかったが、敵が稜線に進攻して来た、との報告を受けた時拳銃と軍刀を握りしめたあの悲壮な顔、また稜線で「うてうてさがるな」と怒号し全員に対し突撃を号令した時の隊長の顔を思い出していた。

突然、宮村隊長が私達に向かつて

「この神勅山の運命も明日一日となった、俺達は明日この頭上で地図を焼却し自決する。お前達も俺にいのちをくれ。重傷者はこの場において自決せよ、軽傷者は銃

をとり最後の一兵となるまでたたかえ、そしていさぎよくこの神勅山で死んでくれ」と玉碎の宣告をした。

隊長の決意を聞いたとたん、壕のなかには三十人くらい戦友がいたが咳ひとつする者もなく静まり返った。しばらく静寂が続いたのち、突然壕の奥で炸裂音が聞こえ硝煙のにおいが鼻につき、五人の重傷者が自決したことを衛生兵がしらせたが誰一人動く者もなく、隊長がわずかにうなづいただけであった。

再び静寂にもどった。死を覚悟した身でありながら凡人の浅ましき、物心ついたところからのかずかずの思い出が脳裏を走馬灯のようにかげめぐり打ち消そうとすればするほどよみがえってきた。

その時、宮村隊長が靴下に入れた少量の内地米を取り出し、当番兵にめいじて将校用の飯ごうでたかせ、祖国のかおりのするたきあがったばかりの飯ごうと携帯こすりょうを「これが最後のりょうまつだ、みんなでわけあって内地の味をよくかみしめて食ってくれ」といい、また大杉少尉が「まつごの水と思って飲んでくれ」とい

いながら水筒を差し出してくれた誰一人として手を出す者はなかった。

私達は前日らいより一物も口にせず一滴の水も飲んでいないにもかかわらずまったく飢えとかわきをおぼえなかったのは不思議であった。

そのうち誰からともなく飯ごうと携帯こすりょうが順々にまわされてきた。飯ごうの飯をひとさじ口にいれ角砂糖のような携帯こすりょうを一個づつとって巡々にまわした。

ひとさじの飯が飢えているにもかかわらずのどを通らない。またまつごの水だといわれた水筒を口にあてた時のあの心境は生漕忘れることは出来ない（山麓の谷川は敵陣であり水をくみに行くことは出来なかった）。

その後隊長は「明日のたたかいに備えて、皆よく眠れ」といって自らは軍刀を抱いて横になった。然し私は益々目がさえ、足の痛みすら忘れてすぎこしかたを思い出していた。どのぐらいの時が過ぎたのか、突然箕田少尉が白樺をかけ軍刀をひっさげて隊長を訪れた。

各小隊は隊長の突撃命令を受け迫兵戦を展開、数多く

の戦死者は出したが敵中を突破して部隊本部のいるボソボソへと転進したことを報告し、じごの行動について指示をおおいだ。隊長は「俺達はこの神勅山において玉碎する。箕田少尉は直ちに部隊に帰り部隊長の指示を受けよ」と命じ「部隊長よろしく」とつけくわえた。

箕田少尉は「隊長殿と行動を共にさして下さい」といったが「それは許さん命令だ。箕田少尉は直ちに部隊に帰れ」と再度命じた。それを聞いた箕田少尉は「隊長殿お達者で」といいながら隊長の手を握った。「お前もな」と隊長もにぎり返し深々と敬礼し箕田少尉は壕を出て行った。

その夜私たちは一睡も出来ないまま入り口の歩哨により夜明けを知らされた、その時隊長が「壕の入口へ直ちに土嚢をきざげ、そして円匙を用意せよ」と命じた。

それは爆撃で入口をふさがれた時のそなえである。間もなく土嚢は構築され円匙の用意も出来た、これをみた隊長は「負傷者は壕の入口に出て銃を持ってたかえ、他の物は背後の敵にそなえ二手にわかれて直ちに戦闘配置に着き弾丸の続く限りうちまくれ。最後の兵となる

も神勅山を死守せよ」と命じた。

命令と同時に全員配置に着く。私達は入口に築いた土嚢を楯に隊長以下五、六人で配置についた。

気がついてみると前日の朝までうっそうと木々におおわれていた神勅山の壕が前日の猛攻にあい、はげ山になっていた。

しじまのなかにあつた敵陣から夜明けと共に猛攻が始まった「うてうて弾丸の続く限り。一兵たりとも敵兵も近づけるな」と隊長は絶叫する。対岸のパナナ畑が敵陣であり我々の数十倍の弾丸をうってくるが進攻してくる気配はなかった。

眼鏡で敵陣をみていた隊長が大杉小隊の擲弾筒兵に向かって「マンゴの木の下の子の青い服を着た指揮官を狙え」と叫んだ。擲弾筒もまた我々も照準を三百メートルにして集中射撃をするもいっこうにあたらぬ。隊長は再び「マンゴの木を狙え、マンゴの木を」と絶叫した。あせつた射手がしゃにむにうちまくるなか、弾薬手が「目がみえない、目がみえない」とはいまわり出し、衛生兵が弾薬手にかわった。隊長も「俺に銃を貸せ」といって戦死

者の銃を取り銃撃を初め「どうだ俺の銃はよくあたるだろう」といった。

いつのまにかマンゴの木も無惨な格好になり青い服の指揮官の姿もみえなくなっていた。それを確認すべく隊長が眼鏡を手にしたとき、突然「ウン」という声を残してのけぞった。「隊長殿！」といいながら衛生兵がにじりよったとき、頭からどっと血潮がほとばしり、これが宮村隊長の壮烈な最後であった。

玉砕を宣告され、覚悟した十六日であったが、米軍は神勅山進攻をあきらめたのか、一度も進攻の気配がなく日が暮れ、かくしてその口の玉砕はまぬがれたのであった。

— 神勅山より撤退（敵中水を求めて） —

昭和二十年三月十六日の夜、神勅山より撤退することとなり、山岸見習士官以下十一人、宮村隊の生存者は大杉小隊とは別々に隠密裡に敵中を突破して撤退した。

撤退にあたって山岸見習士官より「負傷者はここに残れ」といわれたが、その時ガ島（ガダルカナル）より転進組の橋本上等兵（召集兵）が

「戦友、絶対に残ってはいかん、体力のつづく限り一緒に行動せよ、らくごは即死である。」

といって私を励ましてくれ、原田班長とともに引っ張ってくれるので、私も痛む足を引きずりながら行動をともにすることにになった。

神勅山を撤退してから三日目の夜明け、水を求めて谷間へと移動するなか、草原のなかに通じている広いみちに出た。とにかくそのみちを通ってすこしでも早く水を探すべく進み、どうやらそこが敵陣であると気がついた時はもう遅かった。

誰かが電話線にふれたらしく、突然、どこからともなく銃撃が始まり、私達は草むらへと四散、草原の向うがわにあったジャングルへ向かってすこしずつ草むらをはい進み、ようやくジャングルにたどり着いた。どこからともなく戦友が同じところ集まってきたが三人がついに来なかった。

私達がジャングル目がけてしつように攻撃してくるのでひそかにジャングル内を移動。かなり長時間攻撃が続いたが格別進撃してくる気配もなくじよじよに攻撃は遠

のいたのでその場で日没を待つことにした。

昼過ぎと思われるころ、ものすごいスコールがやってきた神勅山で玉砕を宣告された時、まづこの水と思って水筒の水を口にして以来一滴の水も飲んでいなかった私達は、それとばかりに飯ごうや鉄帽など水のためられる容器すべて、空に向けて雨水を受け、自らも大きな口をあけて空を仰ぎ、必死で雨を受けた。

約二十分ぐらい続いたスコールがさった時、私達は雨水のたまった容器はもちろん、落葉にたまった水、立木の葉についた水滴までむさぼりすすったが、のどのかわきをみたすことができるはずもなく、無性に水が飲みたくなつた。

夜になってジャングルを出た。私達は部隊本部のある方角を確認するためであった。

長距離砲弾がうなりながら頭上をかすめ、はるかかなたに炸裂している。ともかく砲弾が落下している地点が友軍の陣地であることは間違いない。砲弾の炸裂しているほうがくへと進みながら谷間へおりるべくさいど草むらに出た。米軍は日本軍の斬りこみを警戒して照明弾を

高く打上げ、草原は真昼のようにあかるく、とても集団では行動できない。各個に匍匐前進で草原を出てようやく敵の反対側の斜面にたどり着いたが、そこで誰も動かなくなつた。

とにかくこの斜面をくだれば、必ず谷川に出るはずだ。「今は本部のほうがかどころではない。水をさがすが先決である」と原田軍曹と私が山岸見習士官に進言したが、山岸見習士官は「水、水がなければおれはもう動けない。」といって動こうとしない。飢えとかわきは誰も同じであった。それを聞いた原田軍曹が「指揮官が水がなく動けないとは何事だ。それでも軍人か。」といて動こうとしない山岸見習士官をなぐり「浅川、お前もなぐれ。」と私にいった。すると山岸見習士官は「おれは指揮官ではない、本部のほうがかくすらわからないからお前たち二人でおれたちを誘導してくれ。」といった。「込山班長はどうだ。」と原田軍曹が聞くと込山軍曹も「またワシもおなじだ。頼むから二人で誘導してくれ。」という。このままでは本当にみんなが動けなくなってしまうのでひとまず斜面をおりにして茅ばかりの斜面をすべる

ようにしておりたがいくらおりても谷間に出ない。すこしなだらかなところに出たところで皆がまた動かなくなつた。

もうどうにでもなれ、といった気持で皆が天を仰ぎ寝ころんだ。南十字星がことのほか輝き、空にまたたく星がすべて水筒にみえ無性に水が飲みたくなつて来た。もう誰も声を出す者もなくいたずらに時が過ぎた目がさえて眠れない。耳を澄ましているとどこからともなくかすかに水の音が聞こえるような気がしたのでそばにいた原田軍曹にそのことを話すと、しばらく耳をそばだてていたが「俺にも聞こえる」といい、もう全然動けないという山岸見習士官をみんなでひきずりながら草の斜面をすべりおりた。

しばらくくだった所で誰の耳にもはっきりと水の流れる音が聞こえて来た。それを聞いたとたんみんなが狂気したかのように我先にと谷間にころげおちるようになりおちた。

そこには小さな谷川があった、私達は谷川に入り腹一杯水を飲み、やっと生気をとれどすことが出来た。数

日ぶりに水腹が張つたとたん、にわかに疲労を感じ、皆が谷のあたりで横になりいつの間にかぐっすり眠つた。

どのくらい時間が過ぎたのか目をさました時には太陽が頭のうえにのぼっていた。突然下流から銃声が聞こえ銃弾は私達の頭上をかすめた。しばらくして銃撃がやんだとき、対岸の山上から「オイ敵じゃったか、味方じゃったか」という声が聞こえ、それにこおうして「まだ分かりません」という友軍の声が聞こえた。しかもそれは土佐弁であつた。早速原田軍曹が山上に向かつて大声で「忠勇」と合言葉を叫んだが「義烈」は返らず、銃弾の返事がかえつて来た。再度、原田軍曹が声を張り上げ「忠勇」と叫ぶと、それを合図のように下流からも銃撃が始まり米軍と友軍の両方から攻撃を受けるはめになった（米軍の銃声は軽快であり友軍の銃声はおもおもしかった）。

私達はじよじよに斜面の草むらへと移動した。そこにはゲリラが作ったであろうか、枯草でおおわれた小さな塹壕らしきものがあり、込山軍曹、小林衛生兵長（共に岡山県人）と私の三人が入り、入口には偽装網をはり外

に向かつて銃をかまえた。

しばらくして銃声は止んだ。数分たったころ下流から足音が聞こえ数十人の米兵が私達の下方を通り過ぎて行った。草の間から目をこらしていると私達の壕から五、六メートルはなれたすこし高い所へ三人の米兵があらわれ何かを始めた。

私達は息をこらして米兵の方をみながらそっと手榴弾の安全栓を引き抜きいつでも投げられるよう身がまえた。

その時耳をつんざくように私達のすぐそばで米軍の機関銃が火を吹き始めた。どうやら私達には気づかなかつたようである。これに呼応して友軍の陣地からは例のおももしい重機関銃の音が聞こえ出し、私たちは息をこらして時のたつのを待った。ところがこの時、込山班長の持病であるぜんそくのほっさが始まった。ヒューと息をのんだと思うとつきはせきである。ハッと思った瞬間、小林兵長が略帽で込山班長の口をくりかえしふさぎほっさをおさえた。敵に感づかれたら手榴弾を投げるよりにさきに私たちが蜂の巣になることは必至だったからで

ある。

どのくらいの間であったのか、私にはこの時が生涯で一番長い時間であった。

彼我の銃声が次第におのき、近くにいた米兵も銃撃をやめて立ちあがった。隙間からのぞくと、ガムでもかんでいるのか、口を動かしておりまったく腹だたい態度であった。

背後からも二十人ぐらゐの米兵が一行になって横を通り過ぎていった。しばらくたってから壕のそとに出てみると、曳光弾で焼かれまだいぶっている数百メートル前方の友軍の陣地だったとおぼしき山を米兵は三々五々登っているところであった。

私は込山班長に手をあげて合図しながら谷へとおりました。突然足元で「オイッ」という声が聞こえたので周囲をみたが人影はなく、うろろろしていると「ここだ」というので足元をよくみると、なぎたおしたような草のなかから原田班長の泥まみれの顔がのぞいていた。「班長やられたか」と聞くと「いや大丈夫だ、敵はどこだ」というので「向うの山を登っている」と答えると草をはら

いのけて立ちあがり「これがガダルカナル当時からの身を隠す術だ」といいながら一緒に谷川におりた。そのうちみんなが無事で同じ場所に集まって来た。

山の上には友軍がいることは間違いない、早く連絡をとらないと日が暮れる。と谷川を上流へとあがった。途中数回友軍陣地から発砲され身辺の石にあたって火花を散らす。このままでは友軍にやられてしまうと思っていざるところ、またしても「敵ぢゃったか、味方ぢゃったか」という声が聞こえ「まだ分かりません」という声が聞こえてきた。すかさずそれまで声も出なかった込山班長が、声を限りに「オーイ友軍、連絡を頼む」と叫んだが、またしても銃弾が返事としてかえって来た。ようやく銃声がやんだ時再度、込山班長が絶叫したところしばらく沈黙が続いたので「あがって来い」という返事があり込山班長が一人山を登った。待つこと久し、ようやく連絡がついたのか込山班長から「全員あがって来い」と連絡あり全員が山をはいあがった。案外けわしい草山であり思うようには登れなかった。

中腹まで登ったとき「オーイ早く登らんと山が焼ける

ぞ」と上方から誰かが叫んだ、下方をみると山一面が燃えていた、私達は無我夢中で山をはいあがった。

友軍の陣地にやっと登りついたとたん一面が火の海と化しまさに間一髪であった。友軍の陣地は松山編成の歩兵部隊で木村大隊ということであった、堅固なトーチカ陣地が構築されていたが途中に何の遮蔽物もない稜線があるが、そこは左右の敵陣から丸見えで、しかも今夜は月明かりなので日没を待ち各個前進で通過するように、とこまかい点までおしえてくれた。

稜線の手前で日没を待ち、いわれた通り各個前進で稜線を通したが三叉路で道が分からなくなり、小休止しているところへ騎兵銃を肩にかけた六尺豊かな兵隊が私達のを追うようにやってきた。山岸見習士官が呼び止め、ボンボンへの道をたずねたところ、左手の道をとおり山麓へおりするようおしえてくれた。また途中木の枝がさしてある所には地雷を敷設してあるから気をつけるようおしえてくれ、さらに明りのついた山を指差しながら少尉さんと同じように戦況を話してくれた。

その話声には私は聞きおぼえがあった。異国、しかも戦

場で聞くなつかしい土佐弁であり、同郷の先輩ではないかと直感し、思い切って「曾我部忠延さんぢやないか」と聞いた。その人は驚いて「オオそうじゃ、お前は誰ぞ」という、「浅川じゃ、南浦の浅川和水じゃ」と答えたところ「何、浅川か暗くてお互いに顔がみえん、月明りに出て鉄帽を脱ごう」といいながら寄って来た。二人は月明りのある場所に出て対座し互いに鉄帽をとり、「おお」といって固く手をにぎり、しばらく戦いを忘れ、われを忘れて故郷の昔話に花を咲かし、「ここの運命も明日一日となった、お互いに生還は望めまいが、万一誰かが生きてかえることが出来たら必ずこのことを家族に伝えよう」と固い約束をしました。そして別れぎわに私達が数日らしい何も食っていないことを知り、先輩は雑糞から携帯ごうりょうを全部取り出し「皆で分けてくれ」といって差し出してくれた。先輩は古参曹長であり巡察中であるということであった。

先輩とわかれ、神勅山より撤退してから一週間の朝、ようやくポツポツの部隊本部に帰還、中隊の人事係助手准尉のところへ申告に行った。壕から出てきた准尉

当番の井内上等兵が私達の顔をみるなり「アッ」といって壕のなかにはいり准尉をともなって出てきた。助手准尉は涙を流しながら「よく無事にかえってきてくれた」といって私たちの手をにぎり、「ご苦労、ご苦労でした」と何度にもにぎりしめ、三月十六日未明、神勅山の宮村隊長のもとに連絡にきた箕田少尉の報告により、私たちは宮村隊長以下二十五人、神勅山において昭和二十年三月十六日玉砕となっていたということであった。

その日、ようやく数日ぶりで軍医に傷の手当てをしてもらい、張りつめた弦が切れたのか、その夜から動けなくなり戦友に面倒をみてもらうことになった。

その後、後方の患者部隊に後送され治療、昭和二十年五月、前線復帰、五月のタコ高地奪回作戦に数回参加、二回目の斬り込み作戦で高木中尉（中隊長）も戦死、私達二中隊は二人の隊長を失ったのであった。

その後連隊副官が三人目の中隊長代理として着任してきた。そして六月中旬、部隊の転進中、熊沢部隊長もヒヨ鳥越えにおいて戦死されたことを聞いた。

そして武藤章中将の命により昭和二十年九月十五日パ

イテにおいて武装解除を受けたが、その時の中隊生存者は五十崎隊長代理以下僅かに五人であった。

私の軍隊日誌

(ルソン戦末期)

岐阜県 藤川 一 男

大正十年名古屋で生まれ、昭和十六年甲種合格となる。遠州浜松在、三方ヶ原九十七部隊へ十七年入隊する。甲種幹部候補生として水戸陸軍飛行学校へ入校、十八年二月卒業と同時に昭南島「カラン」第三航空軍第二十四飛行場大隊へ初年兵をいんそつし、見習士官として赴任する。

十八年九月「ジャカルタ」へ行き十四年飛行場大隊は移駐のため、私は「ジャカルタ」飛行場整備班長となり、「スラバヤ」「マラン」「ボゴール」「カリヂャチ」「バンドン」「パリギ」「グリヤ」「ダシクマラヤ」等をまわり大小さまざまな飛行場を知ることが出来た。

翌十九年四月昭南「テングー」飛行第七十七戦隊整備隊長として赴任する。着任してみると、この戦隊は「ニューギニアのホーランヂャ」において戦隊長以下戦死し、生き残りの中野少尉が少数の兵と共に戦力を回復するための戦隊であった。いんそつの補充兵を引渡すと同時に昭南島「センバワン」第十七練成飛行隊に充用される。

十九年十月十五日比島「マニラ」南方総軍航空兵器部付となる。情報によれば、総軍は西貢に転進中。十月十八日第四航空軍司令部付で十一月四日四航軍へ赴任のため森少将に随行「カラン」飛行場離陸。同日「マニラ」「ニルソン」飛行場に侵入をはかるも上空敵機で不能となり海上退避後やっと着陸する。状況すこぶる悪るし。宿舎に入るも「空襲サイレン」燈火管制となんと落ち着かない。

第四航空軍司令官富永中将に森少将と共に申告をし、同時に司令官より口頭により四航軍航空兵器部付「小沢大佐」勤務となる。本当にあわたたしいなかで推移した。管制下の暗いなかで毎日が過ぎた。飛行機補充がままな